

『4K・8K実用放送』 開始まで1年！

—— 拍車がかかる各社の取り組み ——

1年後の2018年12月1日、4K・8K実用放送が開始される。BS右旋による4K放送を行うのはNHK、ビーエス朝日、BSジャパン、BS日本（2019年12月1日開始予定）、BS-TBS、ビーエスフジ。BS左旋による4K放送はSCサテライト放送、QVCサテライト（2018年12月31日開始予定）、東北新社、WOWOW（2020年12月1日開始予定）。BS左旋による8K放送はNHK。そして110度CS左旋による4K放送はスカパー・エンターテイメント（8ch）だ。本特集では、開始1年前の4K放送局に事業戦略や編成方針を取材。またA-PABに4K・8K実用放送の普及促進や受信環境整備の施策を聞いた。さらに普及期における視聴手段として期待されているケーブルテレビ業界の取り組みについて取材した。（取材・文：渡辺 元・本誌編集長）

Inter BEE 2017でパネルディスカッション

民放キー局系BS 5社

「テレビ視聴への回帰」というチャンス

「何が何でもビジネスモデルに乗せる！」

11月15日～17日に開催されたInter BEE 2017では、基調講演「4K・8K実用放送に向けて」の中でキー局系BS5社の幹部が一堂に会したパネルディスカッション（モデレータは塚本幹夫・株式会社ワイズ・メディア 代表取締役 メディアストラテジスト）が行われた。まだ具体的な事業戦略や編成方針は語られなかったが、各社は4K実用放送のビジネスに対する抱負を語った。

BS日本 取締役 編成局長の神蔵克氏は「4Kコンテンツの出口はインターネット配信などいろいろなものがあり、放送局は後発だ。

我々ができることは、テレビ局として持っている高いクリエイティブ能力と技術革新をマッチングさせて、『テレビ放送が4Kになってよかった』と視聴者に実感してもらえるような番組をどれくらい作れるか、ということに尽きる」と、制作ノウハウと技術によってOTTなど4Kの競合事業者との差別化を図ると述べた。

ビーエス朝日 常務取締役の壁谷祐一郎氏は「どういうコンテンツが視聴者に『4Kにしてよかった』と言われるようなものなのかを探りつつ、積極的に取り組んでいきたい。BSは地上波に比べ視聴できる世帯数が少ない。



キー局系BS5社の幹部が一堂に会したInter BEE 2017でのパネルディスカッション。会場は満員となり、立ち見が出るほど聴講者が集まった

4K放送をきっかけにしてBSのマーケットを拡大することにもとても期待している」と、4K実用放送によるBS市場の成長を目論む。

BS-TBS 常務取締役の高田卓哉氏は「4K放送をとにかく見てもらい、ビジネスモデルに乗せなければいけない。そのためにはスポーツやニュースなどの生放送に加えて、しっかり企画を練ったドラマやバラエティを放送し、視聴者に支持していただけるようにする。何が何でもビジネスモデルに乗せる」と決意を示し、企画